様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３４４

研究課題名（和文）バルザック『セザール・ビロトー』の生成批評版の構築

研究課題名（英文）A genetic edition of Balzac's Cesar Birotteau

研究代表者
鎌田　隆行（KAMADA, Takayuki）

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：３０４３６９８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：フランス学士院図書館ロヴァンジュール文庫所蔵のバルザック『セザール・ビロトー』の生成資料の調査に基づいて、資料の主要箇所の註付きの転写版を作成し、ウェブ上で公開した。他方、この調査によってバルザックの作品制作における、登場人物の再登場システムや、作中で重要な意味作用を持つ飲食表象の場面が生成途上で発展する様態を解明することができた。

研究成果の概要（英文）：We investigated genetic documents of Balzac's novel Cesar Birotteau (Library of the Institute of France, Lovenjoul Collection) to create a transcription with annotations for important parts of the documents; we published the transcription online. This examination also allowed us to elucidate the developmental process of Balzac's creation, particularly in terms of the reappearing characters and the construction of significant eating scenes.

研究分野：フランス文学

キーワード：バルザック　十九世紀小説　生成論

１．研究開始当初の背景

（１）バルザック生成論研究の展開として、S.ヴァッションらが『人間喜劇』所収の作品が互いに有機的なつながりを持つことを重視し、「マクロジェネティック」を推進してきた。このアプローチは小説家の極めて複雑な作品刊行様態（新聞・雑誌、単行本、シリーズ）を明らかにし、バルザック研究に大きな成果をもたらしたものの、刊行された印刷物の検証が中心であったため、草稿や校正刷りといった、版本の準備に使われた資料の精査は十分に進んでいなかった。よって、『人間喜劇』の個別の生成資料について最も信頼できる先行研究は、依然としてプレイヤード新版（1976-1981）の注釈であるが、刊行から 30 年以上が経過し、更新や補填が求められる情報は少なくない。

（２）したがって、バルザック生成論において特に求められているのは、マクロジェネティックの既存の成果を踏まえた上で、『人間喜劇』所収の個別作品の執筆と作品群（「研究」、「情景」）の統合化の関係を解明するのに寄与する草稿・校正刷りの詳細な分析である。『人間喜劇』の収録作品は 100 点近くを数えるため、まずは複数的な作品計画の生成運動を見通すための戦略的なコーパスの選択が求められよう。

（３）こうした観点から研究代表者はこれまでにバルザック『幻滅』第二部『パリにおける田舎の偉人』（1839）の生成資料の分析を行い、2006 年に著作として刊行した。その後、『パリにおける田舎の偉人』とほぼ同時代の作品で多くの再登場人物を共有し、密接な関係にある『セザール・ビロトー』の調査・分析を進めている。特に、ジャーナリズムや出版業の主題が『セザール・ビロトー』執筆時の導入・発展を経て『パリにおける田舎の偉人』において十全に展開していったプロセスを研究論文で明らかにした。またこうした個人研究と連動させながら、2010 年 6 月にはパリにて国際シンポジウム「バルザックと他の作家の作品生成の交錯、エディションの歴史」をジャック・ネーフ氏とともに主催して、バルザックと他の十九世紀作家の作品制作の広範な比較検討を行った。このことによって最新の生成論の動向を把握し、また来るべき研究の展望や方法論についてフランスや日本の第一線の研究者と活発な意見交換を行うことができた。

２．研究の目的

（１）本研究はこうした作業の延長上に位置づけられるものである。複雑な生成過程を経て刊行された『セザール・ビロトー』の変容をより包括的に解明する基盤をつくるため、同生成資料の主要部分について、参照が容易な転写版を作成して公開することを目的とする。

（２）具体的には、初校段階のヴァージョンの転写を行い、必要な註を付した上で、インターネット上で電子媒体によって公開を行う。

（３）他方、この資料体の分析によって、同作品の生成過程についてどの段階でどのような内容の変化が生じたか、また同時期のバルザックの他の作品群とどのような相互影響関係があるかを明らかにし、研究発表や論文などの形で成果を公開する。

３．研究の方法

（１）『セザール・ビロトー』の生成資料の基本情報の整理のため、主要な校訂版（プレイヤード版、クラシック・ガルニエ版）の解説および注解全体、関連するその他の先行研究を参照し、また、研究代表者がこれまでに同資料体について進めてきた調査結果（研究ノート、部分的転写、論文）を見直した。これにより、テクスト成立過程の時系列的進展を把握するとともに、同作品および関連する諸作品の生成資料の所在状況と構成を確認した。

（２）春季休業・夏季休業の時期を利用して渡仏し、フランス学士院図書館ロヴァンジュール文庫にて原資料と関連資料の調査を行った。資料（草稿、校正刷り）の前後関係を検証し、新たな解読作業を進め、翻刻を記録しつつ、注解メモを作成した。また各種図書館・書店等でバルザック、十九世紀フランス文学、生成批評に関連する資料を収集し、参照した。

（３）以上のデータに基づいて『セザール・ビロトー』転写版の作成を行い、これに註を付けて電子媒体版を作成した。また、作品の成立過程についても最新の調査状況にもとづいて更新版を作成してこれに付した。

（４）バルザックや十九世紀フランス文学を対象とする国内外の研究会、シンポジウムに参加し、本計画による研究成果を発表する機会を持つとともに、多岐にわたるバルザック研究や生成論研究の動向の把握に努めた。口頭発表をもとにして共著や紀要論文等の形で研究内容をまとめた。

４．研究成果

（１）『セザール・ビロトー』原資料の調査結果をまとめ、上記箇所の転写版を完成させ、註とともにこれを電子版としてウェブ公開した。これによって、同テクストの参照を容易ならしめるのみならず、今後の草稿の検討やまた再校以降の段階の検討に対しても資する資料体を提供することができた。

（２）資料調査と転写版の作成を通じて『セザール・ビロトー』の意味作用と生成段階での変容を考察し、その成果を公開した。各年度の主な成果は次の通りである。

① 2012 年度には共編著『バルザックと他の作家の作品生成の交錯、エディションの歴史』の電子出版を行った。これは前述の 2010 年 6 月の国際バルザック研究会のシンポジウムの報告集であり、バルザックおよびバルザ

ックと緊密なつながりのある作家たちの作品生成を比較検討することを主眼とし、日仏の研究者による 16 編の論文を収録した。所収の拙論《 Points de suture : un axe de dynamisation intra/intergénétique chez Balzac 》では、『セザール・ビロトー』等の原資料の分析に基づき、バルザックの創作においてミクロとマクロのレヴェルにおいてそれぞれ執筆構造化とプログラム化という別種の原理があり、異質な二つの方向付けによって、常に創造的な挙措を招来する計画化・変容・再統合の循環的メカニズムが形成されていることを明らかにした。また、紀要論文《 Une double genèse et ses effets. La construction des paroles de Nucingen dans César Birotteau et La Maison Nucingen 》では、『セザール・ビロトー』と『ニュシンゲン銀行』におけるニュシンゲン男爵のアルザス訛りの発話の構築を検証した。『セザール・ビロトー』では作者は校正段階で次第に人物の訛りを強調し、その存在感を高めている。一方、ほぼ同時期に執筆された『ニュシンゲン銀行』でも男爵の訛りが見られるものの、発話が極端に少なく、校正を経てもその分量は変わっていない。ここではニュシンゲンはあくまでも影で蓄財する不可視の人物なのである。以上から発話表象によって二作品を「表」と「裏」の対にして構築したバルザックの創作様態を明らかにした。

② 2013 年度には、論文「バルザックにおける『全集』と『知』」において、『人間喜劇』における知の問題を総合的作品の構築という相のもとに考察することを試みた。作者が早くから総合的著作を計画し、制作上は個別作品の変容を促しながらも統合的な作品を構築し、出版上は多様な刊行形態を通じて「全集」を目指す、という二重の運動の中で、連作的機制や「社会種」のコンセプトを発展させていった過程を跡付けた。

③ 2014 年度には、論文「食卓の登場人物たち―『セザール・ビロトー』の新居祝いの場面の生成」において、同作品におけるポピノ宅での広告文の披露と飲食の場面の意味作用を生成論的に分析した。草稿段階では簡素な食材やポンス酒によるささやかな飲食の場面に商品広告のくだりが組み込まれていたが、初校の際に決定的な変容が生じ、初出人物ダランクールから再登場人物フィノへと広告文の書き手が変更され、これに連鎖した書き換えにより、ゴーディサールによって豪華な食事とワインが振舞われる饗宴の場面が成立した。こうした食卓のカーニバル化はまた、言葉のカーニバル化を伴っており、芝居がかった台詞を口にし、歌を口ずさむ陽気なゴーディサールのキャラクターの形成が行われたことを論証した。また、共著の『近代科学と芸術創造―19 世紀～20 世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係』の第 16 章では、バルザック「金利生活者論」において、無為にして物見高く、同時代の凡庸を体現する一群の人々として描かれるランチエの肖像の原型が『セザール・ビロトー』のモリヌー氏にあることを指摘した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①<u>鎌田隆行</u>，食卓の登場人物たち―『セザール・ビロトー』の新居祝いの場面の生成，信州大学『人文科学論集』第 2 号（通巻 49 号），165-175，2015，査読無．

②<u>鎌田隆行</u>，バルザックにおける「全集」と「知」，南山大学地域研究センター共同研究 2013 年度中間報告「19～20 世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係」，13-26，2014，査読無．

③<u>鎌田隆行</u>，Une double genèse et ses effets. La construction des paroles de Nucingen dans César Birotteau et La Maison Nucingen，信州大学『人文科学論集』＜文化コミュニケーション学科編＞，第 47 号，61-74，2013，査読無．

〔学会発表〕（計６件）

①<u>鎌田隆行</u>，『そうとは知らない喜劇役者』―再発見の旅，関西バルザック研究会（大手前大学），2014 年 12 月 23 日．

②<u>鎌田隆行</u>，バルザックにおける「書物」と「全集」，関西マラルメ研究会（神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ），2014 年 9 月 15 日．

③<u>鎌田隆行</u>，バルザックと食―生成批評の観点から，合同バルザック研究会（お茶の水女子大学），2014 年 5 月 24 日．

④<u>鎌田隆行</u>，Monographie du rentier―バルザックによる「凡庸」の分析，南山大学地域研究センター共同研究「19～20 世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係」第 6 回シンポジウム（南山大学），2014 年 3 月 27 日．

⑤<u>鎌田隆行</u>,バルザックにおける「全集」と「知」，南山大学地域研究センター共同研究「19～20 世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係」第 3 回シンポジウム（南山大学），2013 年 3 月 29 日．

⑥<u>鎌田隆行</u>，バルザックにおける第二次の架空テクスト―支持体の生成論の試み，東北大学文学研究科シンポジウム「無名時代～表現の獲得」（東北大学），2012 年 12 月 8 日．

〔図書〕（計２件）

①<u>鎌田隆行</u>，『近代科学と芸術創造―19 世紀～20 世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係』（第 15 章～第 16 章），行路社，2015，pp.261-299．

②<u>鎌田隆行</u>，Jacques Neefs (éd.), Balzac et alii. Génétiques croisées. Histoires d’éditions, actes du colloque organisé par le Groupe International de Recherches

Balzaciennes, 2012. 227 頁. 電子出版. http://balzac.cerilac.univ-paris-diderot.fr/balzacetalii.html

〔その他〕
『セザール・ビロトー』生成資料転写版（ウェブ公開）
https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/kamada_1/docs/CB.pdf

６．研究組織
(1)研究代表者
鎌田　隆行（KAMADA, Takayuki）
信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号：30436985